

ニッポンハム食の未来財団 2024 年度第一期 団体活動支援助成 完了報告書

企画活動名	LFA アレルギーっ子寺子屋～守らないキャンプ～ in 関東
フリガナ	オオモリ マユコ
申請者（代表者）氏名	大森 真友子
団体名（正式名称）	団体名：LFA 食物アレルギーと共に生きる会 申請者の役職・肩書など：代表

1. 活動結果要約

LFA の重度食物アレルギー児童のキャンプは、安心して楽しめる体験を目的とはせず、保護者不帯同の修学旅行や課外授業等のリハーサルとして位置づけ、子どもだけで行動、体験させることで、命を守る術を身につけ、行事にも自主的に、前向きに参加できるように導くことを目的としている。今回は、神奈川県内の宿泊施設にて、重度食物アレルギー児童 20 名にて 1 泊 2 日のキャンプを行い、医療従事者は見守りという形で参画した。寺子屋タイムでは、PAE 小児アレルギーエドューケーターによる保護者がいない状況での食事面や注意すべき行為、そして体調や薬の管理方法等を第三者へ伝える方法を学ぶ機会を実施した。

関西で毎年行っているキャンプの形を事業モデルとして関東で実施したが、多様化する飲食店や食の選択肢が多い地域特有の課題が浮き彫りとなったことから、事前にアレルギー状況のヒアリング面談や体調コントロールの講習を追加した。

同じように食物アレルギーがある児童同士であることから、打ち解けも非常に早く、特にヒヤリハットについては、保護者の交流会以上に数多くの体験について語り合う姿が印象的であった。楽しいイベントの数は多い地域でも、悩みを話し合える場は少なく、子ども交流会の必要性を強く感じる結果となり、アンケートでは治療を再開したという声を多く聞くことができた。

2. 活動目的

学校現場では、コロナ禍の影響によって課外授業や修学旅行での引率経験がない教員が増えたこと、また、コロナ対策として今まで持参した弁当をバスの中で食べるという行為が、道の駅にて自力で飲食店を探し食べる形等に変化してきている。

そういった背景を踏まえ、平時より当事者が誤食を防ぐための意識をもち、第三者に場面に応じて体調や状況を伝えることが課外授業では非常に重要となるが、食物アレルギー児は初めて保護者と離れて過ごす経験が課外授業になることも非常に多いため、不安も大きい。

このキャンプ事業は、専門家の協力の下、保護者非依存型の疑似体験を通し、食事面や注意すべき行為、そして体調や薬の管理方法等を第三者へ伝える学習など命を守る術を身に付けることを目的としており、親子ともに事前に学ぶ機会を作ることが教職員側・保護者側・当事者の負担を軽減することにも繋がっている唯一無二のキャンプである。

また、私たち患者会側が、教育現場の栄養教諭や旅行会社と同じ立場に立って、施設や保護者のやり取りを体験するため、やり取りを進める中での気づきなど情報を共有し、食物アレルギー児を受け入れる側、お願いする側の両方への啓発活動にも努めたい。

3. 活動方法

(医療関係者の同伴の元、保護者を伴わない1泊2日キャンプを実施)

・2025年3月29日(土) 8:40 集合 ～ 3月30日(日) 17:00 解散

足柄ふれあいの村(〒250-0121 神奈川県南足柄市広町 1507)

(内容)

- ・寺子屋：食品表示の見方 長谷川実穂 PAE
- ・昼食体験(コンビニおにぎり購入と自分で選ぶ体験)
- ・寺子屋：緊急時の対応・第三者への声かけ

- ・夕食体験（BBQ・焼きそば・たこやき・カレー・おにぎり）
- ・寺子屋：スキンケア講習 渡木綾子 PAE 他 2 名 PAE
- ・朝食体験（宿泊施設提供の食事を食べる際の注意点や実践）
- ・寺子屋：自分の身体を知る・アレルギー症状について・治療について
- ・昼食体験（非常時や施設が食事対応不可の場合の練習、アルファ化米と常温レトルト）
- ・おやつ体験（パフェ作りを通して、お友だちにアレルギーがあった際の配慮について）

（計画通りには実施できなかった内容）

【時期】【予定冊子内容の変更】【大人の人員減少】

- ① 希望していたいくつかの宿泊施設について、地域優先早申込や、抽選、全員アレルギー児童という点から予定していた9月に施設をおさえることができず、3月末の開催となった。
- ② 依頼していた講師の体調不良等のため、予定していた内容の冊子の配布ができなかったが、代わりに食品表示について患者会としてのアドバイスをページに追加する、別の医師の協力を仰ぎ、監修をしてもらう等、対応した。また人員も当日の講座後に講師の体調悪化のため、途中で帰ることとなり2名減ったが、グループごとワークショップを崩し、仲良くなった参加者ごとのグループ編成で2日目は対応することが出来たので問題なく活動できた。

（計画から外れて実施した内容）

【追加オンライン講座と面談】【マイクロバス】

- ① 花粉の多い時期の開催になり、参加者のほとんどが花粉症や喘息をもっていることから、事前の体調コントロールのプチ講座をZOOMにて開催、アレルギー状況などの申告以外に、個別に面談を行うなどが必要となり実施した。
- ② 一日に朝と夕方の2本しか公共のバスが施設近隣にない、駅から非常に離れた施設のため、帰りは子ども達の体力を考慮してマイクロバスをチャーターした。

4. 結果及び波及効果

(結果)

参加者合計 40 名 (宿泊 36 名、日帰り 4 名)

食物アレルギーがある小中学生 20 名、食物アレルギーがある大学生 7 名

参加者地域 (東京・千葉・神奈川・埼玉・茨城・静岡・山口)

運営 3 名 ボランティアスタッフ 4 名、

医師 2 名、小堀大河 (小田原市立病院 小児科)、伊藤淳 (小田原市立病院 小児科)

PAE4 名、渡木綾子 (看護師)、石井由美 (看護師)、須藤綾子 (看護師)、

長谷川実穂 (管理栄養士)

アンケートの一部

・関東で開催してくださってありがとうございました。このキャンプに参加することで本人の気持ちを優先してあげることができてそして色々な市販品を食べるきっかけになったり、ずっと後ろ向きだった負荷も本人から『アレルギーの数を減らしたい!』とアレルギーと向き合うきっかけとなったこと私たち親子にとってはものすごい一歩です。重度アレルギーの息子が他のお友だちのようにバーベキューしたり宿泊したり、このような経験をできる日が来るとは思っていなかったなのでこの2日間は息子にとって一生の宝物の時間となりました。リーダーさんたちも常に寄り添ってくださり心強かったそうです。ありがとうございました。この気持ちをどんな言葉でお伝えしていいかわからないくらい感謝しております。

・たくさんお友だちもできて、サポートしていただいたみなさんととても優しく接していただいたのでとても楽しかったようです。帰ってきてからママのことなんて一度も思い出さなかったわ!と寂しいやら嬉しいやらな感想が出るほど楽しめたようで、親の方が不安だったんだな。と思って安心しました。

・全員にアレルギーがあるということがとても新鮮に感じた。まわりにアレルギーがある子はあま

りいないので同じアレルギーがある子がいて自分1人だけではないんだな、と嬉しく感じた。食品表示の話や食べる練習の話やいつも食べているものでも成分表示を確認する大事さなど学べて良かったです。

医療従事者の先生から

打ち合わせでポロっと出たお母さまの一言「宿泊行事は参加できなくてしょうがない」から、子どもたちの経験する機会が失われることがあることを実感しました。

5. 今後の活動について

(所期の結果) 得られた。

今年の林間学校や修学旅行についていく予定だった親子が、保護者と子どもで話し合い、子どもだけで行くことにしたという声や、諦めさせてきていた合宿などもしっかり話し合いをしたうえで、参加させてみようという気持ちになれたという保護者の声があった。また、医療従事者の方々に、生で見て頂いた子どもたちのヒヤリハットや治療への想いも今後の現場でアドバイスする際に、きちんと説明していきたいという声があった。

(波及効果)

自立への意識、治療の意味、この先にぶつかる壁を医療従事者や大学生らとの対話を通して理解できたことによって、キャンプ後にすぐに治療を再開した子どもたちがいた。楽しむだけのイベントではなく、一歩を踏み出せた機会になったことを実感した。

また、課外授業などでの薬の持っていく方、事前コントロールの必要性など、保護者たちに伝えておくべきポイントを再確認することができ、全国発信するハンドブックに新たなポイントを追加することができた。

事前のヒアリングを行い、食物アレルギーがある親子の地域性課題が浮き彫りとなったが、どの部分を補足していくことが必要なのか、医療従事者及び運営側として学ぶ機会となったため、今後の関東での患者会活動に生かしていきたい。

以上